

小・中学校国語研究部

I 研究主題

思考力・判断力・表現力の育成を図る指導法の工夫
～「意見文」を書くことを通して～

II 研究主題設定の理由

平成20年度の「学習指導要領改訂の経緯」では、我が国の児童・生徒の課題として「思考力・判断力・表現力を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題」が挙げられている。また、平成20年1月の中央教育審議会答申では、思考力・判断力・表現力の育成のために「①体験から感じ取ったことを表現する ②事実を正確に理解し伝達する ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする ④情報を分析・評価し、論述する ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」という学習活動が不可欠であり、「その中心となるのは国語である。」と明記されている。

研究員同士で学級の実態について話していた時にも、自分の言いたいことは言うけれど、その理由は、何となくであったり、はっきりしなかったりと根拠を挙げられない子どもたちが多いという意見や、たくさんの知識や情報があるにもかかわらず、意見や発言をする際にそれらが十分に生かせないで、その場で思いつくままに発言をしているという意見が出た。2009年度のPISAの、「必要な情報を見つけ出してとりだすことはできるが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることが苦手」という分析と、研究員たちが日頃感じている実態とが合致した。

そこで、本研究部では学習指導要領で求められている力でもあり、また、自分の学級の児童・生徒に最も身に付けてほしい力でもある、「自分の思いや考えを書く」活動を柱にした研究を進めることとした。論理的に説明し、読む人を納得させられる意見文を書く活動を通して、思考力・判断力・表現力の育成を図りたいと考え、本研究主題を設定した。

III 研究の内容

－ 仮説 －

意見文を書く過程を通して、思考力・判断力・表現力を養うことができる。

1 研究の手立て

○小・中学校の系統性をもたせた指導内容の検討。

- ・小・中学校国語研究部の共通した課題として「意見文」教材を選定。
- ・学習指導要領の「書くこと」の項目を整理。
- ・小・中学校の発達段階における「評価規準」や「ルーブリック(判定基準)」について比較、検討。

(1) 小学校国語部

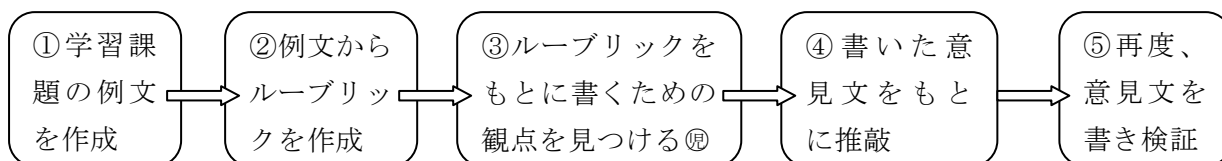
小学校では「意見文を書く」という活動を通して、

- ・ルーブリック(判定基準)に照らし合わせ、どのように指導、支援していけば児童

の変容を促せるか。

- ・ルーブリック(判定基準)を評価にどのように生かしていけるか。

の2点を重点に研究を進めることとした。研究の流れは以下の通りである。



- ① 書くための観点を見つけるため、良い例、悪い例の例文を教師側で作成。
- ② 例文から、ルーブリック(判定基準)を作成。判断の目安、指導の流れ、実際の支援方法などを検討。
- ③ 児童同士で、例文をもとに書くための観点を見つける学習活動を行う。意見文を書くための手順を明確にするとともに、意見文の構成、必要な要素等の理解を深めた上で文章を書く。(児童の活動)
- ④ ルーブリック(判定基準)をもとに児童同士で自分たちの書いた意見文を見合い、推敲する。ルーブリック(判定基準)に照らし合わせて互いに評価するとともにアドバイスし合う。
- ⑤ 異なる課題でもルーブリック(判定基準)を生かして、文章が作成できるか、書く力は身に付いたか、追加教材を使用して検証する。

《ルーブリックの検証》

研究員4人で評価するとともに、2校同時並行で同じ内容の授業を行い、同様の評価を行った。それぞれの視点で評価し、ルーブリック(判定基準)が信頼できる内容になっているか検証を行った。

(2) 中学校国語部

① 研究の過程・重点内容

小・中学校の系統性をもたせた指導内容の検討

小学校国語部の研究と共通した課題について「意見文」を教材として取り組んだ。学習指導要領[書くこと]の項目を整理し、小・中学校の発達段階における「評価規準」や「ルーブリック(判定基準)」について比較、検討した。

② 「評価規準」・「判定基準」の作成

意見文に関する「評価規準」「判定基準」の作成に取り組んだ。「評価規準」については学習指導要領をもとに検討、作成した。「判定基準」については「評価規準」をもとに仮の「判定基準」を作成した。

③ 「判定基準」の信頼性の検討

「判定基準」をもとに生徒の意見文を4人で判定し、各自の判定結果を比較した。その結果、「判定基準」そのものについて検討の必要性を感じ、「判定基準」を作成し直した。改めて新「判定基準」を使い判定したが、依然として差異が大きい部分もあり、更なる信頼性の検討が必要と感じた。

④ 「判定基準」に基づく、再度の意見文作成

生徒に新「判定基準」を提示して、再度前回と同じ内容での意見文を作成させ、その変容を比較、分析した。

IV — 1 実践例（小学校）

1 教材名 「グラフや表を引用して書こう」（光村図書 小学5年）

2 本時の学習活動（5／7時）

(1) 目標 友達の書いた文章を読み、更に説得力をもった文章にするためのアドバイスをを行うことができる。

(2) 評価規準 書いた文章を読み合い、授業で確認した「説得力のある文章を書くための観点」を基にして、優れた点を具体的に指摘している。 【書くこと】

(3) 展開

学 習 活 動	学 習 内 容	指導と評価の創意工夫	時間
1 本時の学習課題をつかむ。 友達の文章を読み、より説得力をもった文章にするためのアドバイスをしよう。		・前時に書いた文章を確認して、友達と読み合おうとする意欲をもたせる。	2
2 評価の観点を確認する。	○評価の観点 ・段落構成 ・資料の説明の仕方 （注目する言葉、数字） ・まとめ方・主述の関係 ・接続詞・文末表現	・評価の観点を黒板に掲示して明確にする。	1
3 アドバイスの仕方・聞き方について確認する。	○アドバイスの仕方・聞き方 ・良いところと改善点を区別する ・「○○すればよくなる」というアドバイスの言い方 ・メモをとる	・必ず一人につき一度は意見を言えるように声かけを行う。 ・「○○すればよくなる」というアドバイスの言い方をおさえ、積極的に意見交換ができるよう配慮する。	2
4 グループごとに分かれて、ルーブリックを行う。 (1) グループの隊形になる。	○交流の仕方 ・よく書いているところ ・直したいところ	・それぞれで読み評価する時間、話し合う時間を前もって児童に知らせておき、時間区分をはっきりさせておく。 ・読み終わり、評価もしてしまった児童は、メモ欄にアドバイスを書いておくように声掛けを行う。	15
(2) 児童の書いた文章をグループ全員で回しながら読み合う。 (3) A、Bの評価をしていく。	○話し合いの仕方 ・司会の決定 ・良いところ、改善点の順番での話し合い	評価場面 ＜具体的評価規準＞ 書(1)カ ＜評価方法＞話し合い活動の様子 ＜手立て＞ ・「目当て」が十分達成されている児童には、評価の観点到記されている項目ごとに意見が言えるように助言する。 ・活動に取り組めていない児童には、アドバイスの仕方を改めて示し、どのように学習を進めるのかを助言する。	
(4) 全員の評価が終わったら、話し合いをして、アドバイスをしていく。		・評価の観点到記したアドバイスになっているかどうかを確認する。	12
5 話し合いで出たアドバイスを発表し、全体で共有する。	○発表する内容 ・アドバイスした内容 ・納得したアドバイス	・評価の観点ごとに意見をまとめられるよう留意する。 ・次時の修正につながるように、友達から言われたアドバイスを振り返られるよう配慮する。	10
6 次時の予告を聞く。			3

3 資料を比較する例文

Aの例

わたしは、日本の社会は、これからもっとくらしやすくなっていると思います。なぜなら、ごみを出さないようになってきているからです。さまざまな産業の分野でリユースやリサイクルが進んでいるし、わたしの周りでも、リサイクル品を活用したり、ごみを出さないように心がけている人がたくさんいます。

下のグラフは、家庭からのごみ排出量を示したものです。上の折れ線は、一人一日当たりの排出量を表していて、下の棒グラフは、日本全体の排出量を表しています。これを見ると、どちらも2001年を境に、だんだん排出量が減ってきていることがわかります。折れ線のいちばん高い2001年と2006年の一人一日当たりの排出量を比べてみましょう。2001年は約810グラム、2006年は780グラムで、約30グラム減ったことがわかります。家庭からのごみの排出量が減っているということは、一人一人の小さな努力の積み重ねが成果を上げているのだと思います。5年で30グラム減らせたことを思うと、20年後には、100グラム以上減らせるでしょう。

このように、日本の社会では、一人一日当たりのごみの排出量が、5年間で30グラム減っています。ごみの少ない社会は、くらしやすいといえるでしょう。日本は、くらしやすくなっているといえます。

Cの例

わたしは、日本の社会のくらしやすさについて考えました。ごみを出さないようになってきました。家庭からのごみ排出量を調べてみました。その資料から、だんだん減ってきていることがわかりました。2001年は約810グラム、2006年は780グラムでした。家庭からのごみが減っているということは、一人一人の小さな努力の積み重ねが成果を上げているのです。

そして、日本の社会では、一人一日当たりのごみの排出量がへっています。日本はくらしやすくなっているといえます。

- ① 主張がない
- ② 3段落でない
- ③ 構成ができていない
- ④ データに基づいていない。
- ⑤ 接続詞が正しく使われていない。

上記のものをもとに、例文の比較から「書くための観点」を見つけ、確認したのち、課題に沿って意見文を書いた。また、児童が、意見文を書く際には、下記の判定基準表を手元におかせ、それに沿った内容かどうかの確認をしあった。

4 ルーブリック (判定基準)

	A	B	C
立場	主張があり、身近な例が書かれている。	主張があるが、意見が具体的ではない。	主張がない。
構成	始め・中・終わりの構成にまとまっており、自分の生活に関係づけさせて書かれている。また将来の展望も書かれている。	始め・中・終わりの構成にまとまっている。	始め・中・終わりの構成にまとまっていない。
	主張・事実(データ)、理由づけ・主張の構成になっている。	主張・事実(データ)、理由づけ・主張の構成になっている。	主張・事実(データ)、理由づけ・主張の構成になっていない。
根拠	理由づけが、自分の気持ちだけではなく、事実(データ)に基づいており、具体的な数値やキーワードが書かれている。	理由づけが、自分の気持ちだけではなく、事実(データ)に基づいている。	理由づけが、自分の気持ちだけではなく、事実(データ)に基づいていない。
言葉	接続詞のバリエーションを複数使っている。	接続詞が正しく使われている。	接続詞の使い方を間違えている。または使われていない。
	書き言葉が使われている。	書き言葉が使われている。	書き言葉が使われていない。話し言葉になっている。

5 アンカー作品 【富岡小児童Aさんの作品の変遷】

アドバイス前 (評価C)

ぼくは、日本の社会は、これからくらしにくくなっていくと思います。なぜなら、毎年犯罪の件数が150万件以上あるからです。

グラフは、日本全体の発生件数です。長い方が発生件数で短い方が容疑者が捕まった件数を表したものです。

これを見ると、事件の容疑者が全員捕まっていないことが分かります。1995年と2002年を比べると、発生件数が多くなったことが分かります。さらに容疑者が捕まった件数が減ったことが分かります。事件が発生しているということは、人がルールを守っていない人がいるからだと思います。

容疑者が全員捕まっていない社会は、ルールを守れていない社会はくらしにくいと思います。



アドバイス・支援

- ・「始め」の中に身近な例があるといいよ。
- ・グラフの説明、グラフから読み取れること、理由づけは1つの段落にするといいよ。
- ・グラフの説明のところで、「長い方」がよく分からなかったから、「黒色の棒グラフ」のようにするといいよ。
- ・理由づけのまとめをふまえて書くといいよ。
- ・「終わり」には「このように」の接続詞があるといいよ。

アドバイス後

(評価A)

ぼくは、日本の社会は、これからくらしにくくなっていくと思います。なぜなら、毎年犯罪の件数が150万件以上あるからです。ニュースを見るときには、いつも必ず事件のニュースが報道されています。

グラフは、日本全体の発生件数です。白色の棒グラフが発生件数で、黒色の棒グラフは容疑者が捕まった件数を表しています。これを見ると、事件の容疑者が全員捕まっていないことが分かります。また、1995年と2002年の事件の発生件数を比べると、発生件数が約100万件多くなったことが分かります。しかし、容疑者が捕まった件数を比べると、1995年と2002年では約10万件減ったことが分かります。事件の件数が増えているのに、容疑者の捕まった件数が減っているということは、容疑者自体の数が増えているのではないかと思います。また、事件がこれだけたくさん発生しているということは、ルールを守れていない人が多いからだと思います。これから先、人は増えていくと思うので、今後もっとたくさん事件や容疑者が増えていくでしょう。

このように、日本では事件や容疑者がとても多いことが分かります。事件や容疑者の多い社会はくらしにくいといえるでしょう。日本はくらしにくくなっていくと言えます。

【山口小児童Bさんの作品の変遷】

アドバイス前 (評価C)

わたしは、日本の社会はこれからもっとくらしやすくなっていくと思います。なぜなら交通事故が最近減っているからです。交通事故のニュースをあまりきかなくなってきました。

下のグラフは、事故件数を示していて、折れ線グラフは死者数を示しています。グラフを見ると2004年から事故件数が減ってきていると分かります。折れ線グラフは、1965年から減ってきていることが分かります。

事故件数が、一番多かった2004年は約90万件です。2011年は、70万件です。7年間で約20万件減っています。死者数が、一番多かった1965年から2011年の間に約6200人減っています。事故件数と死者数が減っているということは、一人一人の注意の結果だと思います。

これからは、事故件数は、7年間で約20万件減ったということは、14年後には約40万件減るでしょう。死者数は、46年間で6200人に減ったということは、92年後には12400人減るでしょう。日本はくらしやすくなっています。

アドバイス・支援

- ・2段落目に数値から読み取れることを書こう。
- ・接続詞を入れよう。
- ・3段落の文章構成にしよう。

1回目の評価では、十分にループリックが浸透していない。

(評価B)

私は、日本の社会は、もっとくらしやすくなっていくと思います。なぜなら交通事故が減ってきているからです。最近、交通事故のニュースをあまり聞かなくなってきました。

下のグラフは、事故件数を示していて、折れ線グラフは死者数を示しています。このグラフを見ると、2004年から事故件数が減ってきています。事故件数が一番多かった2004年は約90万件、2011年は約70万件で、約20万件減ったことがわかります。死者数が一番の多かった1995年は、約1万人、2011年は約5000人で約5000人減っています。事故件数と死者数が減っているということは一人一人の注意の結果だと思います。事故件数が7年で約20万件減ったということは、14年後には約40万件減るでしょう。死者数は、46年で6200人減っているので、92年後には12400人減るでしょう。

このように、日本の社会では事故がとても減っています。事故件数、死者数の少ない社会はくらしやすいと言えるでしょう。日本はくらしやすくなっていくでしょう。

1回目から2回目へは、書き直しを行ったので、最後に新しい課題で総括的評価を行った。

追加教材 (評価A)

(評価A)

「所沢に住んでいる4人家族の山田さん一家が大阪に家族旅行に行くには、自動車、新幹線、飛行機のどれでいくのが一番よいか」を主張する課題

僕は、家族旅行に出かける時、乗るものは新幹線がいいと思います。なぜなら、車だと道が混んでいる所があって、気持ち悪くなってしまった時があったし、飛行機では料金が新幹線に比べて高いと思ったからです。

下の表は、所沢から大阪までの移動を比べたものです。所沢から大阪までかかる「時間」「料金」「エネルギー」を、新幹線と飛行機と自動車それぞれ比べています。これを見ると、新幹線と自動車の時間を比べた時には、新幹線は3時間40分で着くのに対し、自動車は5時間50分と2時間以上も差が出てしまうことが分かります。さらに、新幹線と飛行機の値段を比べると、新幹線の方が飛行機より一人あたり1万円も値段が安いことが分かります。所沢から大阪まで行くのに、時間がかかりすぎたり、お金をたくさん使ってしまったりするということは、観光するうえで不便だと思います。これから先、自動車や人は増えていくと思うので、もっと道が混んだり、料金が高くなったりするでしょう。しかし、新幹線なら道が混む必要もないし、飛行機よりはるかに安く行くことができるでしょう。

このように、自動車では時間がかかりすぎるし、飛行機では料金が高すぎるということが分かります。時間がかかりすぎたり、料金が高すぎたりするということは観光するうえでは不便でしょう。家族旅行は新幹線で行ったほうがよいです。

私は山田さん一家は新幹線で大阪に行くのがいいと思います。なぜなら、自動車だと家族の中で一人が運転しなければならぬし、飛行機だと耳がジンジン痛くなる可能性があります。私の近所の人もこの間新幹線によって楽しく旅行に行ってきたと言っていました。

下の表は所沢から大阪までの移動の時間や料金、使うエネルギーを示したものです。下の表を見ると新幹線は3時間40分、飛行機は2時間40分で自動車は5時間50分です。時間を比べると新幹線は2番目に早く行けます。料金も自動車は1台で21000円なので2番目に安いです。エネルギーは約0.5Lなので、1番少なく環境に優しいです。新幹線は総合的にみると1番いいことがわかります。その分、大阪に着いたら、少し長く観光をして、少しだけ多くお金を使えると思います。

このように、新幹線は全体的にみると1番いいです。山田さん一家は新幹線で大阪に行くと思いに残る楽しい家族旅行になると思います。

- ・3段落構成になっている。
- ・身近な例、体験が入っている。
- ・具体的な数値やキーワードが入っている。
- ・「理由づけ」が、グラフからの事実(データ)にもとに書かれている。
- ・将来の展望が書かれている。

6 評価の変遷

	1回目 (アドバイス前)		2回目 (アドバイス後)		追加教材 (別課題)	
	富岡小	山口小	富岡小	山口小	富岡小	山口小
A評価	3人 (9%)	3人 (7%)	7人 (20%)	14人 (42%)	4人 (21%)	9人 (30%)
B評価	8人 (23%)	12人 (35%)	18人 (51%)	10人 (29%)	17人 (52%)	8人 (27%)
C評価	24人 (69%)	19人 (58%)	10人 (29%)	10人 (29%)	12人 (36%)	13人 (43%)
A+B	11人	15人	25人	24人	21人	17人

7 実践のまとめ

- ・書く手順、書くための観点を明確にし、書いた後の推敲をすることにより、何をどう書くかを理解し、表せるようになった。読ませる文章としての表現力が向上した。
- ・ルーブリック(判定基準)に照らし合わせることで、より個に応じた支援が可能となった。
- ・個人間、学校間での差異は大きくないが、C評価の検討が必要。基礎学力の課題がはっきりとした。

8 今後の課題

- ・ルーブリックの内容のさらなる検討。
- ・C評価の児童の底上げをどう図るか。

IV－2 実践例（中学校）

1 教材について

「立場と根拠を明確にして書こう 意見文を書く」（光村図書 中学2年）

本研究では、「意見文を書くに当り、その根拠を『新聞記事』の中から選択すること、反論を予想し、それに対する意見を述べることを通して、思考力・判断力を養うことができる。さらに、わかりやすい文章を書こうと構成などに工夫をすることで、表現力を養うことができる。」と仮定している。そのために、本教材は適切であると考えている。

2 評価規準

【学習指導要領の内容】 書(1)イ (2)言語活動例イ、 伝国(1)イ(ウ)

・国語への関心・意欲・態度

設定したテーマに対する自分の立場を明確にして、意見を書こうとしている。

・書くこと

自分の立場、事実や事柄を明確にし、相手意識、目的意識をもって、反論を予想しながら、文章の構成を工夫している。(1)イ

・伝統的な言語文化に関する事項

文の中の成文の順序や照応、文の構成などについて考えて書いている。(1)イ(ウ)

3 ルーブリック（判定基準）

観点	A	B	C
立場		テーマについて、賛成か反対か、立場が明確になっている。	テーマについて、賛成か反対か、立場が明確になっていない。
構成		双括弧の形で、「立場→根拠→反論への意見→立場」と、四つの要素が順序立てて書かれている。	四つの要素が欠けている。または、順序立てて書かれていない。
根拠	具体的な事実に基づいた適切な資料を選択することで、説得力のある意見が述べられている。	具体的な事実に基づいて、意見が述べられている。	具体的な事実が書かれていない。または、事実と意見がかみあっていない。
反論	反論が想定されていて、それに対する、具体的な事実に基づいた意見が述べられている。	反論が想定されていて、それに対する、納得できる意見が述べられている。	反論が想定されていない。または、納得できる意見が述べられていない。

4 学習の重点内容

(1) 立場の明確化を図る。

- ① 複数の選択肢において、それらの選択肢の持つ内容を図や表などに表し、その差異を明確にし、その意見を相互に確認し合いながら他者の考えを知る。
- ② 自他の意見に基づいて、それら選択肢の長所（よい点）・短所（悪い点）を

比較、検討し自らの支持する意見により「立場」を明確にする、という手だてを習得する。

- (2) わかりやすい意見文を書くための「構成」を検討する。
 - ① 「双括式」という構成方法を知り、それに従って構成を検討する。
- (3) 自らの立場を支える根拠及び反論に対する意見を検討する。
 - ① 立場を支える「根拠」となる具体的な事実を、どのように活用すれば説得力のある意見になるかを検討する。
 - ② 自らの立場に対する「反論」を想定し、その反論を具体的な事実を活用して論破（あるいは自分の考えを強化）する意見を検討する。
- (4) 既習の知識・技能である「原稿用紙の使い方」を確認するとともに、言語事項（誤字・脱字、主述の係り受け等の文法事項）の技能を確認、習得する。
 - ① 「原稿用紙の使い方」を確認することにより、構成（段落の配置等）が明確になるような記述の仕方を確認する。

5 実際の指導例

- (1) 学習の見通しを持つ。意見文を書く上での、具体的な手順を確認する。

国語科学習プリント 二年組 番 ()

立場と根拠を明確にして書こう 意見文を書く

- 1 学習のねらい
 - ・ 立場とそれを支える根拠を明確にして、構成を工夫しながら意見文を書く。
 - ・ 書いた文章を読み返し、読みやすくわかりやすい文章になっているかを推敲する。
- 2 論題 「震災がれきの受け入れについて賛成か 反対か」
- 3 条件
 - ・ 六〇字以上八〇字以内にする。
 - ・ 原稿用紙一行目から本文を書き始め、氏名は指定された枠に記入する。
 - ・ 学習のねらいに沿って、以下の点を意識して書くこと。
 - ① 立場を明確にする ↓ 賛成か、反対か、はっきりさせる
 - ② 根拠を明確にする ↓ なぜ賛成（反対）かの根拠をはっきりさせる。事実に基づいて根拠を！

根拠となるのは

 - ③ 構成を工夫 ↓ 双括式（自分の意見・立場） ― 意見を支える根拠 ― 反論に対する意見 ― 自分の意見（立場）

※ 反論も根拠に基づいたものを書くこと！

- ④ わかりやすい文章になっているかを推敲する ↓ 言葉の係り受け

誤字・脱字、原稿用紙の使い方
文体（です・ます だ、である）の統一
- 4 進め方
 - ① 配布された資料を読み、このとき、次のことを意識すること。
 - ・ 自分の立場 賛成か反対かを決める。
 - ・ 賛成・反対、両方の立場の根拠となる事実をチェックする。
 - ② 構成案を書き、先生に見せ、原稿用紙を受け取る。
 - ③ 下書きを書く。
 - ④ 下書きを推敲する。推敲したものを先生に見せ、清書用の原稿用紙を受け取る。
 - ⑤ 清書をする。
- 5 評価基準
 - 3の条件に合っているかが評価の基準になります。条件を意識して書くこと！

※ 自分自身の意見の根拠となっている資料は何か、しっかりと確認すること！

- (2) 新聞記事を読み、自分の立場を支える根拠となる記事を選択する。新聞記事から根拠や、反論に対する意見を考える。

今回は「東日本大震災」の「震災がれき」を処理するため、「所沢市が受け入れるべきか否か」の意見文を、新聞記事を具体的な根拠として書くこととした。

- (3) 構成を考え、意見文の下書き及び清書を書く。（第1回）
- (4) 「ループリック」をもとに自分の意見文を見直し、再度清書を書く。（第2回）生徒に「ループリック」を示し、構成・根拠・反論についてそれぞれで再度検討し、より完成度を上げる取組を行った後、2回目の意見文を書いた。

6 実践のまとめ

(1) 第1回・第2回の意見文についての評価結果の比較

次の表は、1回目と2回目の意見文を、猪口指導主事にもご協力いただき、4人で4つの観点及び総合の評価を行い、比較したものである。

立場	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第1回 金澤	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第2回 金澤	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第1回 田中	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第2回 田中	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第1回 猪口	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第2回 猪口	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第1回 高根	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第2回 高根	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B

立場…1回目・2回目ともに全員ができていた。

構成	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第1回 金澤	B	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B	B	C	B	C	C	C	C	B	C
第2回 金澤	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B
第1回 田中	B	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B	B	C	B	C	C	C	B	B	B
第2回 田中	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第1回 猪口	B	B	C	B	B	B	B	B	C	C	B	B	B	B	C	C	C	C	B	B
第2回 猪口	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
第1回 高根	B	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B	B	C	B	C	C	C	C	B	B
第2回 高根	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B

構成…「C」評価数は、1回目21個が、2回目では3個に激減した。

根拠	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第1回 金澤	B	A	A	A	A	A	A	B	C	C	A	A	C	A	A	A	B	C	A	A
第2回 金澤	A	A	B	A	A	A	A	A	A	B	A	C	A	B	A	A	B	C	A	A
第1回 田中	C	B	B	A	A	A	A	A	B	C	C	A	B	C	B	C	C	C	A	B
第2回 田中	A	A	A	A	B	A	A	A	B	C	A	B	B	A	C	B	B	C	A	B
第1回 猪口	A	A	B	B	A	A	A	B	C	A	A	A	A	C	B	C	C	C	A	A
第2回 猪口	A	B	B	A	A	A	B	A	A	B	A	B	B	A	B	B	B	B	A	A
第1回 高根	A	A	B	A	A	A	A	B	C	B	A	A	B	B	C	B	B	A	A	B
第2回 高根	A	A	A	A	A	B	A	A	B	C	A	B	B	A	B	C	C	B	A	B

根拠…「C」評価数は、1回目18個が、2回目8個に半減した。

反論	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第1回 金澤	A	A	C	C	B	B	C	C	C	C	C	C	B	A	A	A	C	A	B	C
第2回 金澤	A	B	B	A	B	B	A	B	C	C	B	C	A	A	B	B	B	A	A	A
第1回 田中	A	B	C	C	A	A	B	C	B	C	B	B	C	A	C	C	C	A	B	A
第2回 田中	A	B	A	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	A	B	C	C	C	A	A
第1回 猪口	A	B	C	B	B	B	A	B	B	C	A	B	B	A	C	C	C	A	B	A
第2回 猪口	A	B	B	A	B	B	A	B	B	B	B	C	A	B	B	B	B	B	A	B
第1回 高根	A	A	B	A	A	A	A	B	B	C	A	A	B	B	C	A	B	B	A	B
第2回 高根	A	B	B	A	A	A	B	A	C	C	A	B	B	A	B	C	C	B	A	B

反論…「C」評価数は、1回目24個が、2回目12個に半減した。

総合	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第1回 金澤	A	A	B	A	A	B	C	C	C	B	C	A	A	A	A	C	B	A	A	B
第2回 金澤	A	A	B	A	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	A	B	B	B	A
第1回 田中	B	B	C	B	A	A	A	C	C	A	B	C	A	B	C	C	C	B	B	A
第2回 田中	A	A	A	A	A	A	A	A	B	C	A	B	C	A	C	C	C	C	A	B
第1回 猪口	A	A	C	B	B	A	A	B	C	B	A	A	C	A	C	C	C	C	A	A
第2回 猪口	A	B	B	A	A	A	A	A	B	A	B	A	B	C	B	B	B	B	A	A
第1回 高根	A	A	B	A	A	A	A	B	C	C	A	A	B	A	A	C	B	B	A	A
第2回 高根	A	A	A	A	A	A	A	A	C	C	A	B	B	A	B	C	C	B	A	B

全体的に、「ループリック」を提示することで、「C」評価の意見文を「B」評価に引き上げることに効果が大であるといえよう。

上記の表から明らかな通り、第2回の意見文の方が概して高評価を得ている。したがって、最初の段階から生徒にループリックを示すことが、よりよい意見文作りにつながったと考えられる。

(2) 明確になった支援の手だて

どのような内容が入れば評価が変わるのか。1回目と2回目の比較からそのポイントが明確になった。次の例は、「根拠」が「B」評価から「A」評価へと上がった例である。

<第1回>

<第2回>

	た	あ	て	
	人	る	農	第
	の	い	作	一
	言	思	物	に
	葉	い	な	、
	が	ま	ど	受
	新	す	が	け
	聞	。実	売	入
	に	際	れ	れ
	載	に	な	て
	っ	も	く	し
	て	そ	な	ま
	い	ん	な	う
	ま	な	安	風
	し	安	を	評
	た	持	持	被
	。	っ	っ	害
				に
				よ
				っ



	っ	か	作	が	っ	
	て	ー	物	あ	て	第
	い	な	が	あ	て	一
	ま	な	売	る	て	に
	し	ど	れ	思	て	、
	た	の	な	い	て	受
	。	風	く	ま	て	け
		評	な	す	入	入
		被	な	。実	れ	れ
		害	っ	際	な	て
		を	た	に	く	し
		心	ら	生	な	ま
		配	だ	産	な	う
		す	れ	者	っ	と
		る	が	か	し	風
		声	責	ら	ま	評
		が	任	も	う	被
		新	を	一	こ	害
		聞	と	農	と	に
		に	の		よ	よ
		載				

第1回の「そんな不安を持った人の言葉が」という部分が第2回では「生産者からも『農作物が売れなくなったら誰が責任を取るのか』などの風評被害を心配する声が」と具体的な表現に変わり、説得力が増している。

今回取り上げた意見文は、中学2年生としてはかなり難しい内容であったといえる。今後、意見文を書くにあたって、生徒の発達段階と資料の難易度との釣り合いを図ることが課題の一つといえよう。また、「説得力がある」というような抽象的な表現をどのように生徒に伝えるのかという点も課題である。

V 研究のまとめと今後の課題

1 児童・生徒の思考力・判断力・表現力を育む観点から

小・中共通して、初期の段階で児童・生徒にルーブリック(判定基準)そのものを示すと、書き方の枠ができ、それにしがった表現ができていた。型を示すことにより、書く手順、書くための観点が明確となり、児童・生徒は自分の主張をはっきりと、筋道を立てて述べられるようになった。また、ルーブリック(判定基準)をもとに再度見直したり、お互いに見合って書き直したりという循環、即ち、書きっぱなしで終わるのはなく、表現(書く)→思考(見合い、考える)→判断(何を修正するのか)→再表現(書き直し)→…という書いた後のサイクルも明確になり、自己修正の力も身に付いた。

2 ルーブリック(判定基準)を指導・評価に生かす観点から

漠然と良い文章、読みにくい文章ということではなく、明確な観点が定められ、そうした観点を中心に指導・支援・評価することによって、教員間、学校間での差異があまりなく、発達段階に応じた公平・平等な指導・支援・評価を行うことができた。また、児童・生徒の文章力が明らかに向上するという成果も見られた。

しかし、観点によっては、一人の評価者が「A」、別の評価者は「C」と評価する作品が出現してしまった。研究員同士で検討しながら、ルーブリックを設定したにもかかわらず、評価の段階でこのような差異が生じたのは、「説得力がある」(説得力を持たせるための表現の捉え方)等、ルーブリック(判定基準)に抽象的な表現が含まれていたためと考えられる。ルーブリックにあいまいな部分が残ると、評価者によってその評価にも大きな差が生じてしまう危険性が明らかになった。

ルーブリック(判定基準)を設定し、使用するメリットは大きい。ルーブリック(判定基準)の表現を具体的にして、読めば誰でも共通の理解できるような形で設定できれば、より児童・生徒の思考力・判断力・表現力の向上に生かせるのではないかと考えた。

3 小・中学校のルーブリック(判定基準)の比較に関する観点から

小学校は「立場」「構成」「根拠」「言葉」の4観点とし、中学校は「立場」「構成」「根拠」「反論」とした。小学校の「言葉」という観点は、中学校ではできて当たり前と考えあえて設定しなかった。採点していても、その点で問題を感じることはなかった。逆に、小学校では難易度が高く加えなかった「反論」という観点を中学校では加えている。

「立場」「構成」の小学校の「A」評価の内容は、中学校では「B」評価として扱われている。これは、中学校の段階では、「当然できてほしい内容」と判断したからである。なお、「根拠」という観点について、小学校では「具体的な数値やキーワード」が用いられていれば「A」評価となっているが、中学校では「具体的な事実に基づいて」は前提条件として、さらに「自分の意見を支えるために適切な資料を選択すること」という条件が加わるなど、同じ「A」評価でも、発達段階に応じた差異が示されている。